

自己の課題解決を中心に単元構想を立てた。その中で、他者との関わりを通して課題解決をすることで、成長を実感することができると考えた。教師は、ファシリテーターとしての役割を果たし、子どもたちのつないできた点と点を結んでいく必要がある。その一つは、日々の授業での声掛けである。教育支援アプリを用いたOPPシート（資料5）は、前時のうちに次時の個人の課題が分かるものである。一人一人の子どもの課題を事前に把握できることで、授業時の声掛けの参考とした。また、OPPシートへは毎回コメントとして、子どもたちの励みになるような言葉や、困っている子どもには、次時に向けてのアドバイスとなる言葉を記した。また、毎時間の終末に、学びを振り返る時間を設けた。仲間のアドバイスのおかげで解決につながったという意見や、仲間の名前を出しながら自分の動きの変容を述べるなど、仲間と関わり合うことよさに気付く子どもが多くなった。子どもたちの言葉に教師が学びの価値付けを行ったことで、子ども自身が他者へ積極的によかったところを伝えようとする様子が見られるようになった。

(イ) 学びから生まれた課題を解決する、みんな「が」楽しい、みんな「で」楽しい関わり

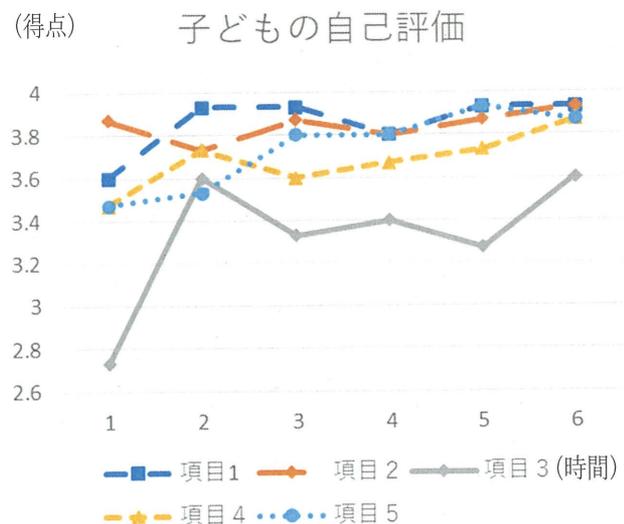
個人の運動を集団の運動に転換し、グループ活動を中心に取り組んできた。先述の「宇和島プラン」で主運動につながる感覚づくりの運動を繰り返し行い、みんな「が」楽しいと思える活動に取り組んだ。成功体験を積ませることで、主運動の動きにつなげることができた。また、グループ対抗戦を実施し、集団の一体感の醸成を図った。さらには、「グループで楽しい」から、みんな「で」楽しいに目を向けさせるために、毎時間の記録測定のポイントを全員で加算したものを比較することも行った。個人の課題解決のためにグループの仲間が対話しながら改善を図り、その結果新たな課題が生まれ、記録の向上につながるというサイクルができた。陸上運動領域のハードル走において、みんな「が」楽しいと感じる関わりを通して主体的に調整する態度を養うことができた。

毎時間の自己評価は、「ロイロノート」のアンケート機能を活用した。回答項目は、愛媛県小学校体育連盟が実施している「体育学習に関する意識調査」を基に作成し平均値を集計した（資料6）。

項目1	今日の授業は、楽しかったですか。
項目2	今日の授業は、進んで取り組みましたか。
項目3	今日の授業で、今までできなかったこと（動き）ができるようになりましたか。
項目4	今日の授業は、めあてを意識して運動しましたか。
項目5	今日の授業で、友達と教え合ったり、考えを伝え合ったりしましたか。

〈資料6 自己評価の項目〉

全体的に自己評価の値が伸びており、特に第1時と第6時の伸びを比較すると、項目3が大きく伸びた。第2時には、練習の仕方を学び、「着地を起点としたリズム」に着目してハードルをリズムカルに走り越えることを理解し、それを習得するために活動した。第3～5時は、数値が上下したが、これは、項目4の上昇という側面から、めあてを達成しようとする思いと、技能面で思うようにできないという部分が表出したものと考えられる。自分の立てためあてを達成したいと肯定的に捉えていることが分かった。本年度の研究では、項目5については第6時に数値があまり下がらなかった。第6時までの活動では、個人の



〈資料7 自己評価の変容〉

課題をグループで解決することを意図的に取り入れて活動する場面を設定したことによって、仲間と教え合ったり、考えを伝え合ったりする必然的な対話を促すことにつながり、その対話が、第6時の記録会においても継続できた現れであると捉える。自己の記録の向上のみならず、グループ活動を継続して取り組むことで、所属感が強まり、グループや集団全体で高まりを望む思いがこのような結果になったと考えられる（資料7）。

エ 子どもの変容

(7) 技能の伸び

本単元の学習では、子どもたち全員が40mハードル走の記録を伸ばすことができた。また、集団における単位を通しての40mハードル走と40mフラット走との記録の差が、第1時の3.22秒から、第6時には1.09秒となり、平均で約2.1秒速く走り越えることができたことにより、記録の伸びが見られた。ポイントについては、ノモグラム〈資料8〉を作成し、フラット走と40mハードル走のタイムの差を点数化し、さらに、リズムカルポイントとして、インターバルを3歩で走り越えた子どもにはプラス5ポイントとした。特に本年度の取組では、グループ対抗戦によるポイントを集積した集団全体での得点は、授業を重ねるごとに上昇し、最終にあたる第6時には232ポイントを記録した。これは、第1時の31ポイントの8倍近い値を出した（資料9）。これは、グループでの得点が上昇したこともさることながら、一人一人の課題に対する毎時間の取組が生み出した結果であると言える。自己の課題をグループで解決する学習展開を取り入れることで、グループ内で課題の共有につながり、教え合いや伝え合いが広がった。カラービブスやリストバンドといった道具セットや対抗戦シート、「できるポイント」「できないポイント」など、課題解決のために必要な環境を整えたことで、誰もがアクセスでき、視点を明確にして動きを見ることができた。個々の40mハードル走のタイムによる比較ではなく、過去の自分のタイムと比較することで、意欲的に活動に取り組むことができた。また、グループ活動や全体での記録の伸びを取り入れたことによって、達成感を味わったり、集団の一体感を醸成したりすることにつながった。

得点表

	時間	点数		時間	点数
40m走より	2.0秒遅い	1	40m走より	0.9秒遅い	12
"	1.9秒遅い	2	"	0.8秒遅い	13
"	1.8秒遅い	3	"	0.7秒遅い	14
"	1.7秒遅い	4	"	0.6秒遅い	15
"	1.6秒遅い	5	"	0.5秒遅い	16
"	1.5秒遅い	6	"	0.4秒遅い	17
"	1.4秒遅い	7	"	0.3秒遅い	18
"	1.3秒遅い	8	"	0.2秒遅い	19
"	1.2秒遅い	9	"	0.1秒遅い	20
"	1.1秒遅い	10	40m走と	同じ	21
"	1.0秒遅い	11	40m走より	0.1秒速い	22

※ 0.1秒速くなるごとに+1点

※ 2.0秒以上遅い場合は1点

※ リズムカルポイント(インターバルを全て3歩)+5点

〈資料8 ノモグラム〉

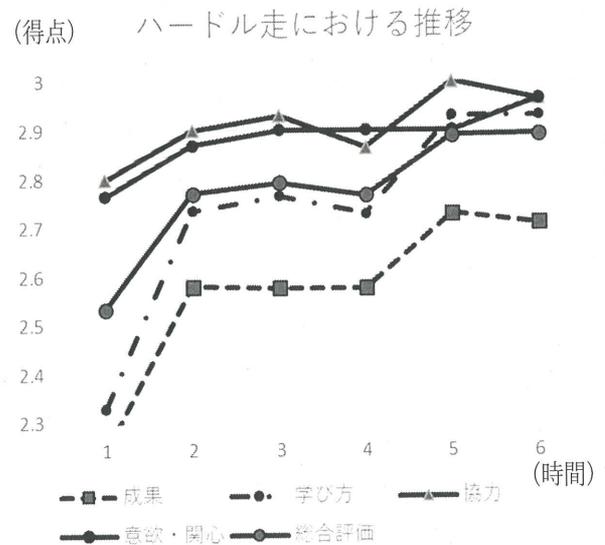
		第1時			第6時		
B	1	9	12	15	18	16	
	1	13	12	10	14	17	
	1	10	2	10	12	13	
	11	58	35	51	63	80	
C	1	17	14	15	16	15	
	1	2	6	7	18	16	
	1	1	6	12	12	15	
	1	6	6	6	6	10	
	6	11	13	15	14	14	
	10	37	45	55	66	70	
全体得点		31	139	140	166	195	232

〈資料9 全体得点の変化〉

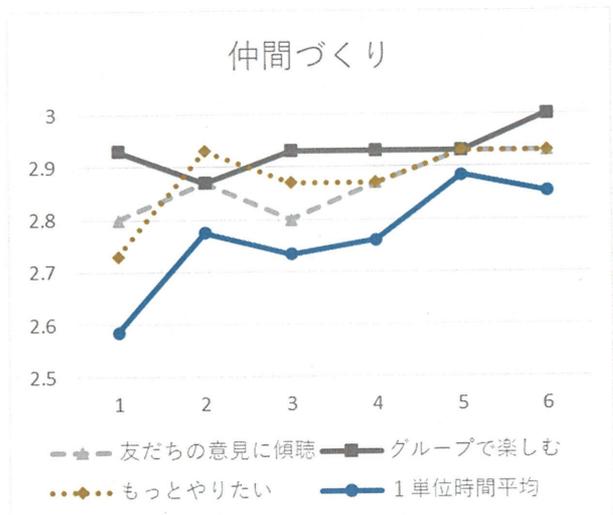
「できるポイント」「できないポイント」など、課題解決のために必要な環境を整えたことで、誰もがアクセスでき、視点を明確にして動きを見ることができた。個々の40mハードル走のタイムによる比較ではなく、過去の自分のタイムと比較することで、意欲的に活動に取り組むことができた。また、グループ活動や全体での記録の伸びを取り入れたことによって、達成感を味わったり、集団の一体感を醸成したりすることにつながった。

(イ) 各種調査による比較

毎時間実施した形成的授業評価では、総合評価が単元を通して着実に向上した。どの項目も第2時にかけて大幅に増加している。第2時は、リズムカルに走り越えるための練習の仕方について学習した。リズムカルに走り越えたいという子どもたちの思いを教師が把握し、一人一人の課題解決がよりよく図られるように授業が展開されたことにより、大幅に伸びたものと思われる。そして、第5時に更に数値はどの項目も上昇した。練習を繰り返す、次時が最終ということもあり、子どもたちの意識の向上が見られた結果である。グループでの活動を取り入れ、個人の課題を解決し、毎回記録測定や動画撮影を行い、個人、グループ、全体で取り組もうという意識を一人一人がもつことができたためであると考えられる。各項目が上昇したのは、「フラット走とハードル走との記録を比較し、課題を焦点化・明確化することで、苦手な子どもも意欲的に取り組むことができる」という授業展開が子どもたちの実態に即していたからであろう。陸上運動は個人運動であり、能力の差が数字となって表れてくる。そのようなこともあり、意欲的に取り組むことが難しい状況となる子どももいる。その課題に対し、過去と未来の自分を比べるという視点に立ち、授業を進めてきたことで、記録は徐々に伸び、成果として表れてきたからこそ、総合評価が上昇を繰り返したものとする（資料10）。また、仲間づくりに関する評価項目を見ると、仲間の意見を傾聴しながら、グループでの活動を楽しみ、もっとグループで高め合いたいという子どもたちの意識が表れている。グループ活動を意図的に取り入れたことやグループ対抗戦、集団全体のポイント集積など、個人の運動を集団の運動に転換したことが奏功したことが明らかとなった（資料11）。



〈資料10 形成的授業評価の推移〉



〈資料11 仲間づくりに関する評価〉

(ウ) OPPシート等の子どもの振り返りから

毎時間のOPPシート及び振り返りの場や、単元終末の振り返りにおいて、自分の課題に対しての感想や、学習で分かったこと、仲間からのアドバイスでうれしかったこと、更には、友達ができるようになったことをまとめたり伝えたりしていた。自分の課題を解決するためにできることは何かを考え、グループの仲間のアドバイスを基に次時の自分のめあてを設定することにつながっていた。また、「見通し」を立て、「行動」し、「振り返る」といったAARサイクルが機能していたことが分かる記述も多かった。合理的な運動の行い方を理解し、グループの仲間と関わる中で、めあてに向かって思考する力を養うことができたと思う。また、協働的な学びを充実させるための学習環境を整えたことで、仲間との関わり合いが生まれ、よりよい課題解決につながったと考える。

4 研究の成果と課題

(1) 教材とつながる

ア 成果

「宇和島プラン」を活用した運動により、身に付けさせたい動きを定着させることにつながった。子どもたちがリズムカルにハードルを走り越える楽しさや喜びを味わうことができた。

イ 課題

「着地を起点にしたリズム」を中心に扱ったが、難しい部分があった。効果的な「宇和島プラン」の開発や学習展開の工夫が必要である。

(2) 仲間とつながる

ア 成果

必要感のある対話の実現のため、再現性の高い既存のメディアを利用したり、グループ活動を取り入れたりしたことで、課題を共有し、解決に向かう姿が見られた。

イ 課題

ハードル走における「つくる」活動の創出に課題があった。スポーツで「あつまり」「ともに」「つながる」ことのできる学習環境を整備する。

(3) 自分とつながる

ア 成果

OPPシートやタブレット端末などを活用したことで、自分の課題を見通して行動に移し、振り返ることにつながった。また、それらが、過去の自分と未来の自分をつなげる手立てとなり、新たな課題の創出に効果を発揮した。

イ 課題

「今までできなかったこと（動き）ができるようになるという」自己評価の数値が、他の項目と比べると低かった。更に実感を伴った理解を促すために、子ども心に響く教師の具体的な声掛けを行う。

〈参考文献〉

「体育授業を観察評価する 授業改善のためのオーセンティック・アセスメント」

高橋健夫（明和出版）

「体育科教育 別冊 走・跳・投の運動の授業づくり」 池田延行 他（大修館書店）

「NHK for School はりきり体育ノ介2 陸上&とび箱に挑戦だ！」

NHK「はりきり体育ノ介」制作班（NHK出版）

「OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来」 白井俊（ミネルヴァ書房）

「新訂 一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性」 堀哲夫（東洋館出版社）

「体育科教育 2023年7月号」 「体育科教育」編集部（大修館書店）

「自己調整学習 主体的な学習者を育む方法と実践」 木村明憲（明治図書）

「今日を生き延びるためにアニメーションが教えてくれること」 佐分利奇士乃（学芸みらい社）

「新版 アフォーダンス」 佐々木正人（岩波書店）

「アフォーダンスを取り入れた新しい体育指導」 根本正雄（学芸みらい社）

自己やチームの課題の合理的な解決に向けた 主体的・対話的な学習活動の工夫

— 第3学年 球技（ベースボール型・ソフトボール）の指導を通して —

松山市立久米中学校 教諭 宇都宮 和

1 主題設定の理由

ソフトボールに関する事前アンケート（対象生徒 33 名、令和 6 年 10 月実施）では、「ソフトボールの授業は好きですか？」という質問に「好き」と回答した生徒は 8 名で「やや好き」と回答した生徒は 12 名、「やや嫌い」が 10 名、「嫌い」が 3 名となり、否定的な回答は 39%となった。

否定的な意見を回答した生徒の理由は、「球技が苦手だから」「ルールが分からないから」「ボールが怖いから」などであった。また、ソフトボールのルールをどれだけ把握しているかを確認するための「打球が高く上がってノーバウンドで捕球をした。この間にランナーは次の塁に進塁できるか、できないか。」という質問に対し、正答率は 42%となり、約半数の生徒がベースボール型のルールが理解できていないことが分かった。このような、ベースボール型特有の複雑なルールが、生徒の苦手意識を助長している要因となっていると思われる。

これらのことにより、打球による送球位置の判断など、場面に応じた動きの説明や指導により、ルールや戦術を理解させていくことが重要であると考えられる。また、ソフトボールの基本的な技能は 2 年時の学習である程度習得しており、3 年時においては、連打を重ねるなどの攻撃や仲間と連携した守備を中心に、自己のチームや相手チームの特徴を踏まえた作戦を立てて練習やゲームを展開することが求められる。さらに、ボールや用具の操作とボールを持たないときの動きに着目させ、学習に取り組ませる必要がある。

本校生徒の実態や本単元の特性から、試合前後の作戦時間やポジショニングを相談する時間を確保することで、生徒の思考を深め、試合中の判断力を向上させることができる。そして最終的には、本単元に対する活動意欲の向上が期待できると考え、本研究主題を設定した。

2 研究の目標

ソフトボールの授業内で、多くの対話活動の時間を設け、生徒自身で試合のルールを考えたり、チームの作戦や戦術を立て、自己の役割や状況に応じた動きの理解を深めたりすることで、学びに向かう姿勢を促進させる授業実践を目指す。

3 研究の仮説

段階的な試合形式の授業の中で対話的な学習場面を多く設定すれば、自身の役割やチームの作戦を理解した動きができ、ベースボール型の特性である規則性のある攻防や守備位置、ボールを投げる位置などを理解した試合を展開することができるようになるだろう。

4 研究の視点

(1) 生徒の実態に対応した指導の工夫

ア 用具の工夫

イ ルール理解のための支援

- (2) 生徒用単元計画の作成
- (3) 主体的・対話的な授業展開
 - ア スモールティーチャーによる作戦タイムの確保
 - イ ルール決定に向けた話し合い

5 研究の実際

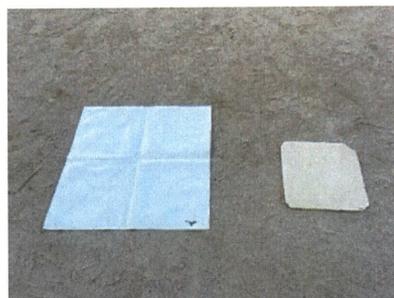
(1) 生徒の実際に対応した指導の工夫

ア 用具の工夫

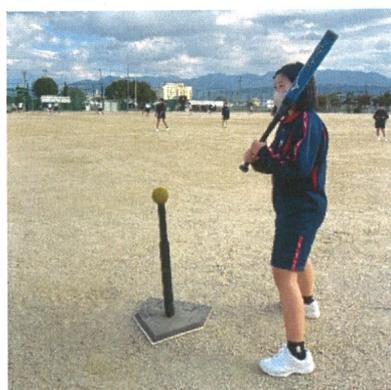
アンケート結果より、ボールへの恐怖心からソフトボールを苦手と感じる生徒が多かったため、単元を通して全ての授業で柔らかいスポンジボールを使用した。また、打者と走者の接触を防ぐための本来のベースの約4倍の大きさのベースを使用した(資料1)。試合の場面では、ボールにバットが当たらないことへの不安感を取り除くためバッティングT台(以下T台)を使用した(資料2)。

イ ルール理解のための支援

ベースボール型のルールの理解に差があり、その差を埋めるために基本的な守備とランナーの動きを表にしてロイロノートで生徒に配布した。守備の合言葉は、「ランナーの前の塁へ送球！無理なら近くの塁！」として考えながらプレーをさせた。また、試合中にもピッチャーの投球前には守備チームに状況の確認をさせたり、悩んでいる生徒がいれば試合を止めたりして、送球場所が分からない状況をつくらないようにした(資料3)。



〈資料1 ベースの比較〉



〈資料2 T台を活用する生徒〉

〈資料3 ロイロノートで配布した守備の基本の動き〉

状況	プレーの選択肢 (優先度が高い順)
フライ	①取るだけでアウト！→②落としてしまったら慌てず1塁へ送球
ランナーなし	①1塁へ送球
ランナー1塁	①2塁へ送球→②間に合わないと判断したら1塁へ送球
ランナー1, 2塁	①3塁へ送球→②捕球位置から近い塁へ送球 or 自分でベースを踏む
ランナー満塁	①ホームへ送球→②捕球位置から近い塁へ送球 or 自分でベースを踏む
★打者が交代するごとにランナーがどこにいるか確認！ ランナーの前の塁へ送球！無理なら近くの塁！	

(2) 生徒用単元計画の作成

単元計画を作成し、各時間の学習活動や、この単元を通して身に付けてほしい力を個人と集団それぞれ示した。生徒自身が、単元の見通しを持ち、それぞれの時間で何を評価するのかを確認したうえで授業に臨むことができるようになることをねらいとして、この計画を単元の1時間目にロイロノートで配布した(資料4)。

時	学習活動	身に付けてほしい力（個人）	身に付けてほしい力（集団）
1	○試しのゲーム ・技能の確認 ・ルール理解の程度確認		
2 3	○技能の習得 ・トスバッティング ・T台を使用したバッティング練習 ・三角ベースによる守備練習など	・基本的なバット操作や打球処理ができる。 ・基本的なルールの理解ができる。 ・捕球から送球まで、スムーズに行うことができる。	・積極的に仲間と教え合うことができる。 ・送球位置の指示の声掛けができる。
4 5	○三角ベースでの試合 ・送球位置の確認 ・ルールの確認 ・ランナーの動きの確認	・ランナーがいる状況での送球する位置を判断することができる。 ・狙った場所へ打つことができる。	・ボールを持っていないときに、仲間に指示が出せる。
6 7	○打者一巡、ランナーを置いた状態での試合 ・ベースカバーの動きの確認 ・ランナーの動きを見たとえでの送球の判断	・状況に応じて、ねらいをもった打撃ができる。 ・ボールの正面まで最短距離で移動し、捕球して正確に送球することができる。 ・場面に応じて適切な塁を素早く判断し、送球することができる。	・打者がどのような打球を打ってくるか仲間に伝えることができる。
8 9 10	○試合形式 ・ルールは各チームで持ち寄り、代表者が話し合って決める。	・打者の特徴を理解し、守備位置を変えることができる。 ・状況に応じて、積極的にランナーをアウトにすることができる。	・うまくできない仲間に教えたり、声を掛けたりすることができる。 ・うまくなろうと努力することができる。

〈資料4 生徒用単元計画〉

(3) 主体的・対話的な授業展開

ア スモールティーチャーによる作戦タイムの確保

各チームで、試合前には作戦会議、試合後には改善点を話し合う時間を各2分程度設けた。また、試合ごとにタイムを何回でもとってよいこととし、チャンスの時にどこをねらって打つのか相談したり、ランナーの動きの確認や守備位置の変更をしたりするなどの時間に活用させた。このとき、ルールを理解している生徒をスモールティーチャーとして、各チーム1人ずつ配置し、状況による動きの確認を仲間に伝えるように指導した(資料5)。



〈資料5 作戦タイムの様子〉

イ ルール決定に向けた話し合い

試合形式のルールを、6時間目のランナーを置いた試合から少しずつ生徒に考えさせた。作戦タイムの後、挨拶の前に、生徒に試合のルール提案をしてもらい、過半数が賛成したらそのルールを次回の授業で採用した。

6 研究のまとめ

(1) 生徒の実際に対応した指導の工夫

ア 用具の工夫

スポンジボールの活用により、送球や捕球に抵抗を感じる生徒がほとんどいなくなった。また、拡大ベースを使用することで、ほぼ怪我なく単元を終えることができたため、こちらも有効であった。T台の使用については、当初は、技能に不安を感じている生徒への支援を目的としたものであったが、狙った場所にボールを飛ばすためにはどのようにバットを振り抜けばよいのかを考えさせることもできた。置いたボールを打つことで、多くの生徒がバッティングについての思考を深めるための支援につながった。

授業後のアンケート結果によると、「ソフトボールの授業は楽しかったですか。」という質問に対して「楽しかった」の回答が18人、「やや楽しかった」12人、「あまり楽しくなかった」2人、「楽しくなかった」1人と、授業前よりも10名の生徒が否定的な意見から肯定的な意見に変化した。理由として、「ボールをバットに当てるのが嬉しかった」、「アウトを取れたときにチームのみんなで喜ぶのが楽しかった」など、「できる」ことの喜びを実感している生徒が多くいた。アンケートでボールに対して恐怖心があると回答していた女子生徒も、スポンジボールの活用により身体に当ててもボールを止めようとしている場面が見られるなど用具の工夫は効果的であった。

イ ルール理解のための支援

ルール理解のための表を配布することによって、野球をほとんど観たことがなく、細かいルールが分からない生徒も、とにかくランナーを進めないための守備という意識をもつことによって、「2塁間に合うよ!」「こっちこっち!」などの声掛けがあるなど、奮闘している様子が見られた。試合中にも展開を追うごとに試合を止めてその都度説明をしたことで、野球をほとんど見たことのない生徒でも、試合を重ねていくうちに送球位置や動きが理解でき始め、周りからの「1塁、1塁!」などの指示の声掛けも増えていった。

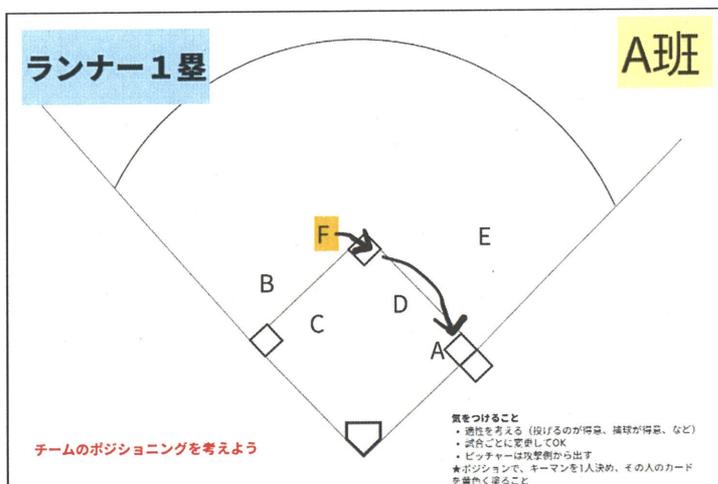
一方で、ルール理解のための取組をしても最終的にほとんど理解できないまま単元を終えてしまう生徒もいた。野球やソフトボールの試合をテレビなどで全く観たことがないという生徒も複数名おり、そのような生徒に対してのルールの解説が困難であった。生徒の単元に対する興味、関心をどのようにして引き出すかが課題として挙げられる。

(2) 生徒用単元計画作成

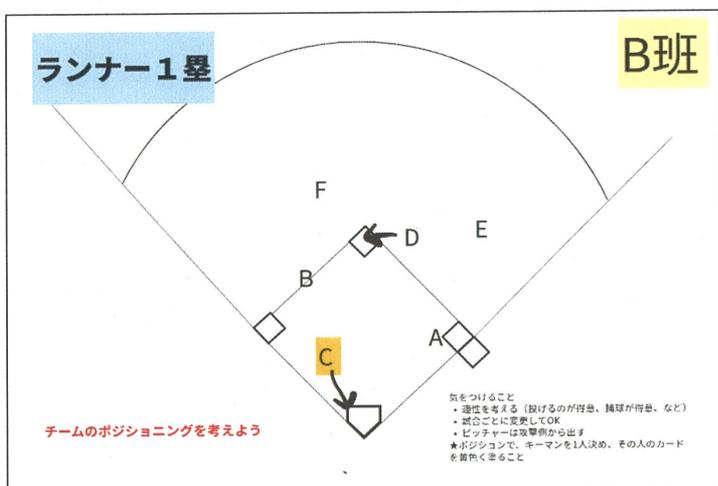
単元計画を生徒に配布することにより、生徒が10時間の授業の見通しをもって授業に取り組む様子が見られた。また、それぞれの時間で身に付けるべき力が分かることで、毎時間の学習活動に課題意識を持ちながら授業を受けさせることができた。このような手立てにより、単元を通した段階的な技能の習得の実現へとつながった。

(3) 主体的・対話的な授業展開

ア スモールティーチャーによる作戦タイムの確保



〈資料6 生徒が考えたポジショニング1〉



〈資料7 生徒が考えたポジショニング2〉

実際に生徒が作戦タイムの中で考えたポジショニングの一例である。この時間は、6人1チームで守り（ピッチャー、キャッチャーを除く）、ランナー1塁を想定して誰がどこを守るのかを考えさせた。このとき、ポジショニングの「キーマン」を一人設定させた。キーマンは、守備位置を考えたときのチームの意図として重要となる人のことで、なぜその配置にしたのかを次のカードに記入させた。

例えば、A班の場合は生徒Fを「キーマン」として、「守備力の高いFを2塁ベース付近に配置することで、2塁でアウトにできる確率を高めた。」と考えた(資料6)。

一方でB班は、生徒Cを「キーマン」として、「バントを警戒してCを前に配置した。2塁への送球が間に合えば2塁へ、無理なら1塁へ送球する。捕るのが上手いDが2塁のベースカバーに入る。」という作戦を考えていた(資料7)。

バッターによって多少の守備位置の変更はしていたが、チーム内での自分の役割を整理することのできる作戦タイムは、教師による授業ではなく、スモールティーチャーを中心に話し合いながら作戦を考えること

で、その目的や意図を持ったプレーが見られた。また、ルールをあまり理解できていない生徒も、パターンによる動きを頭に入れて対応することができた。

授業最初の試しのゲームのときには、ルールが全く分からないと話していた生徒が、最後のアンケート内の感想に「最初はルールも分からないしおもしろくなかったけど、たくさん試合をして、チームのみんなと作戦を考えてそれが成功したときは、とても嬉しかったし、もっといろんな作戦を考えてやってみたいと思った。」と書いており、対話活動の成果が見られた。

しかし、試合を何度も繰り返していくと、授業が盛り上がり、もっとプレーの時間を増やしたいと思う生徒も多くなっていった。授業後半になるにつれて、生徒間の意思疎通が図られ、対話活動の時間が短くなっていく分には問題ないが、意欲的な話し合いになっていない場面が見られた。活発な話し合い活動を最後まで実施するには、より入念な目的意識や学習課題の設定が重要だと実感した。

イ ルール決定に向けた話し合い

第10時において実施した試合のルールが、男子は資料8、女子は資料9である。男子は野球の経験者が各チーム複数人いるなど、ベースボール型のルールの把握もスムーズであったため、より本来のソフトボールに近いルールで試合を進めていった。試合形式の授業を進めていく中で、送球ミスによる進塁で点数が入ってしまう展開が多かったため、送球ミスによる進塁は2ベースまでなどのルールが追加されていった。一方で女子の試合は、最初は打者一巡で交替、ランナーは残らない、1塁出塁で1点、2塁出塁で2点、3塁出塁で3点、ホームランで4点、などの独自のルールを自分たちで考え、みんなで楽しめるルールを検討していた。しかし、授業を重ねていく中で、少しずつルールへの理解も進み、より本来のルールに近い形でソフトボールがしたいという意見が増えた。最終的には、打者一巡、5ストライク、というルールはあったものの守備などは実際のルールに従ってそれぞれの塁に向かって送球、捕球をしてアウトを取るプレーも増えていった。

試合のルールを考えよう

ポイント

- 理由をつける
- 両チームが納得したら採用
- 試合を進める中でより最適なルールを更新していく

○4ボールまでは正規の場所から投げる、4ボールになったら前のラインの位置から投げる

○送球ミスで後ろにそらしたボールは、1つ先の塁まで進塁する

○外野の頭を越えたボールは、2ベースで止まる

〈資料8 男子生徒が考えたルール〉

試合のルールを考えよう

ポイント

- 理由をつける
- 両チームが納得したら採用
- 試合を進める中でより最適なルールを更新していく

○5ストライクまでOK

○4ボールなし

○打者一巡で攻守交代

○チームの中で3人はT台を使ってOK

〈資料9 女子生徒が考えたルール〉

試合のルールを生徒に考えさせることで、試合を重ねるごとに自分たちが納得のいくルールに変更することができ、運動が苦手な生徒も、試合をより全員が楽しめる工夫が多く見られた。教員から、ある程度のルールを提示することは必要だが、生徒たちで考えさせることにより、自分たちのレベルにすり合わせてルールを変更しながら授業を進めることができた。毎時間のルールの柔軟な変更が、生徒の授業への満足感を高めていった。

しかし、今回の研究で対話活動を取り入れた授業に関しては50分の授業当たりおよそ8分間を話し合いの時間に当てたため、運動量は30分程度で、打順が回ってくるのを待っている時間等を考えるとさらに少ない運動量であると考えられる。より多くの運動時間を確保しながら、対話活動や学びに向かう力を育むことのできる学習方法を考える必要がある。

7 引用・参考文献

中学校学習指導要領解説保健体育編 平成29年7月 文部科学省

令和6年度 支部教科等委員長・専門研究委員名簿

(保健体育) 委員会

No.	支部名	委員長氏名	勤務校	電話番号	副委員長氏名	勤務校
1	四国中央	佐藤 福起	松柏小	0896-28-6094	松西 夢紀	三島西中
2	新居浜	久保田 将平	大生院小	0897-41-6627	神田 奈々	東中
3	西条	山口 真司	小松中	0898-72-2744	松木 拳人	神戸小
4	今治・越智	松本 光弘	近見中	0898-22-1094	井上 惇介	乃万小
5	松山	藤本 千秋	道後中	089-921-4207	竹本 尚平	和気小
6	東温	西尾 卓	北吉井小	089-964-2119	大戸 二郎	川内中
7	伊予	山邊 清香	中山中	089-967-0009	立町 優人	伊予小
8	上浮穴	吉見 太智	明神小	0892-21-1058	秋山 裕貴	畑野川小
9	大洲	向井 秀太	肱川小	0893-34-2160	土居 健太郎	平野中
10	喜多	坂本 壮真	石畳小	0893-43-1679	前崎 凧香	大瀬中
11	八幡浜	東 潤	宮内小	0894-36-0039	三好 志伸	八代中
12	西宇和	朝井 豊記	三机小	0894-52-0025	高丸 博文	伊方中
13	西予	末光 晃平	中川小	0894-62-0357	網干 岩雄	三瓶中
14	宇和島	兵頭 浩二	吉田小	0895-52-0103	武田 尚之	城東中
15	北宇和	清家 悠	三島小	0895-48-0011	兵頭 秀則	松野西小
16	南宇和	松田 信	平城小	0895-72-0022	清水 章生	一本松中
17	附属	仙波 弘行	附属中	089-913-7841	大丸 裕基	附属小
	県委員長	作道 勉	松山北中	089-978-3321		

令和 6 年度 教科等・専門研究委員会役員名簿

保健体育委員会

職務内容	氏名	勤務校	職名	電話番号	郵便番号	学校所在地
委員長	作道 勉	松山市立北中学校	校長	089-978-3321	799-2662	松山市太山寺町491-1
副委員長	久保田 将平	新居浜市立大生院小学校	教諭	0897-41-6627	792-0060	新居浜市大生院1070-1
	西尾 卓	東温市立北吉井小学校	教諭	089-964-2119	791-0204	東温市志津川131
	松田 信	愛南町立平城小学校	教諭	0895-72-0022	798-4110	愛南町御荘平城2332
事務局長	藤本 千秋	松山市立道後中学校	教諭	089-921-4207	790-0853	松山市上市1丁目3-57
事務局	竹本 尚平	松山市立和氣小学校	教諭	089-978-0057	799-2662	松山市太山寺町671-3

幹事

職務内容	氏名	勤務校	職名	電話番号	郵便番号	学校所在地
東予	佐藤 福起	四国中央市立松柏小学校	教諭	0896-28-6094	799-0411	四国中央市下柏町407
	山口 真司	西条市立小松中学校	教諭	0898-72-2744	799-1102	西条市小松町南川甲208
中予	山邊 清香	伊予市立中山中学校	教諭	089-967-0009	791-3204	伊予市中山町出渕2番耕地165
	吉見 太智	久万高原町立明神小学校	教諭	0892-21-1058	791-1204	久万高原町東明神甲698-1
	仙波 弘行	愛媛大学教育学部附属中学校	教諭	089-913-7841	790-0855	松山市持田町1丁目5-22
南予	東 潤	八幡浜市立宮内小学校	教諭	0894-36-0039	796-0202	八幡浜市保内町宮内5番耕地46
	朝井 豊記	伊方町立三机小学校	教諭	0894-52-0025	796-0502	伊方町三机乙2515

第2期愛媛県子どもの体力・運動能力向上推進3か年計画の概要

資料

体力・運動能力の現

- 体力合計点は、小中男女とも低下したが全国平均との差はほとんど変化がみられなかった。
- 敏捷性(反復横とび)、持久力(20mシャトルランなど)が全国平均を上回っている。
- 筋力(握力)、柔軟性(長座体前屈)、投運動(ソフトボール投げなど)は全国平均を下回っている。

運動機会の確保

体力向上のために



- 基本方針
 - ・ 体育・保健体育科の授業を充実させることを基本に、児童生徒の運動の日常化に向けた取組の充実を目指す。
 - ・ データを活用し指導に生かすとともに、全教職員が共通理解のもと体育的行事、体育的活動の充実を目指す。
 - ・ 家庭、地域のスポーツ関係団体やスポーツクラブ等と連携し体力向上が図られるよう、行政機関や教育機関との連携を密にし、支援体制の充実を目指す。

04つの柱

体育・保健体育科の授業の充 自己への挑戦 運動習慣の定着 生活習慣の質の向上

目標：学校体育の質の保証・向上 ～体育的活動を充実し、全国平均以上の体力を維持～
【成果指標】 全国体力・運動能力等調査における、体力合計点の県平均が全国平均以上である。

えひめ子ども像〔愛顔(えがお)いっぱい子ども〕

運動に前向きになる(体育・保健体育科の授業)

- ・ 体育の授業は「楽しい・やや楽しい」の児童・生徒の割合・・・95%

体力向上を目指す(自己への挑戦)

- ・ 体力の向上について自分なりの目標を立てている児童・生徒の割合・・・80%

各指標の数値以上を目指します。



日常的に運動に取り組む(運動習慣)

- ・ 1日の運動時間60分以上の児童・生徒の割合・・・50%(小)、80%(中) ※体育・保健体育科の授業は除く

規則正しい生活習慣をもつ(生活習慣)

- ・ 毎日朝食を食べる児童・生徒の割合・・・80%
- ・ 睡眠時間が確保されている児童・生徒の割合・・・80%

具体的な取組

よく分かる授業の創造



「主体的・対話的で深い学び」を中核に据えた授業改善
「指導と評価の一体化」を一層促す授業改善

環境づくりの工夫



えひめ子どもスポーツITスタジアムの活用



チャレンジ部門
(長なわ跳び)



ポイント獲得部門
(エブリディスポーツ)



保護者への啓発



家庭での取組

望ましい生活・運動習慣の確立

令和6年度えひめ子どもの体力向上プラン

【本県の目標】 学校体育の質の保証・向上 ～体育的活動を充実し、全国平均以上の体力を維持～

【成果指標】 全国体力・運動能力等調査における、体力合計点の県平均が全国平均以上である。

《えひめの子ども像》〔愛顔（えがお）いっぱい子ども〕



◆運動に前向きになる（体育・保健体育科の授業）

- ・体育の授業は「楽しい・やや楽しい」の児童・生徒の割合……95%

◆体力向上を目指す（自己への挑戦）

- ・体力の向上について自分なりの目標を立てている児童・生徒の割合……80%

◆日常的に運動に取り組む（運動習慣）

- ・1日の運動時間 60分以上の児童・生徒の割合……50%（小）、80%（中）

※体育・保健体育科の授業は除く

◆規則正しい生活習慣をもつ（生活習慣）

- ・毎日朝食を食べる、睡眠時間が確保されている児童・生徒の割合・・・80%

【※各指標の数値以上を目指します。】

【具体的方策】

1 体育・保健体育科の授業の充実

- (1) 校内研修、授業づくり研修会等への参加による授業力の向上
- (2) ACP（アクティブ・チャイルド・プログラム）の活用
- (3) 授業での主運動につながるウォームアップ及び柔軟性を高める取組の工夫



柔軟性アップの工夫



ACPの活用

2 体力向上を目指し自己への挑戦

- (1) 「R6年度体力アップ推進計画」の策定及び現状把握
 - ① 学校・地域の特性を生かした体力アップ推進計画の作成と実践（各校の重点課題について指標・目標数値を示し、目標達成に向けたプランを1つ以上実践する。）
 - 【体力向上1校1プラン大作戦】
 - ② 中間期測定の推進と児童生徒の目標の設定
- (2) 授業以外で運動する「場」の設定、休み時間を活用した体力づくりの活性化
- (3) 「えひめ愛顔（えがお）のトレーニング」など、動画配信による家庭で取り組むことができる運動の活用



えひめ愛顔のトレーニング



特色ある取組
毎日だれでも握力測定

3 運動習慣の定着（運動の日常化）

- (1) 「えひめ子どもスポーツITスタジアム」への小学校の積極的参加（エブリディスポーツを実践する場の工夫）
- (2) 児童生徒が夢中になる学校行事・体育的活動の推進
- (3) 苦手意識が強く、運動に親しむ機会の少ない児童生徒への支援
- (4) 1人1台端末やCBTシステム等によるデータ利活用の取組



チャレンジ部門
職員研修



ポイント獲得部門
（エブリディスポーツ）

4 生活習慣の質の向上

- (1) 食育、生活習慣について全教職員が共通理解を図った指導実践（学校の教育活動全体を通して）
- (2) 栄養教諭・養護教諭・外部講師等の授業参画
- (3) 家庭への啓発活動の充実（毎日朝食を摂る、睡眠時間の確保を中心に）



親子食育啓発活動



外部講師との連携

小中学校保健体育研究

資料第56集(令和6年度)

発行日 2025年(令和7年)3月

編集 委員長 作道 勉
代表 藤本 千秋(第56集編集担当者)

発行所 愛媛県教育研究協議会 保健体育研究委員会
〒790-0083 愛媛県松山市祝谷1丁目5-33
TEL (089) 946-2772